In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

| | |
|---|---|
| Title | 提示的受動文 |
| Author | 関, 茂樹 |
| Citation | 人文研究. 61 巻, p.128-144. |
| Issue Date | 2010-03 |
| ISSN | 0491-3329 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学大学院文学研究科 |
| Description | 栄原永遠男教授 ： 中村圭爾教授退任記念 |

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第61巻　2010年3月　128頁～144頁



# 提示的受動文*

関　　茂　樹

英語の受動文に関して、これまでに様々な分析が提案されてきている。本論文は、動詞 mean を含む受動文を中心に取り上げる。分析対象となる典型例は次のような文である。By thought is meant the images and atmosphere..../By the history of a language is meant an account of its development in all its dialects.... 数多くの文献の中でもこれまで十分に分析されてはいない構文であり、表面上は単純に見えるものの、興味深い独自の特性がある。まず、先行研究では問題の受動文の特徴が十分に捉えられてこなかった点に触れ、その理由を考察する。統語的には、動詞の数の一致という点において、独自の性質を示していること、およびそれに対する説明を提示する。問題とされる受動文は、外見上は破格構文のように見えるものの、文法に適った文である。統語的な特性と受動文が現れる談話の分析から、このタイプの受動文は、意味機能的には提示文の役割を果たしていることを明らかにする。

## 1．動詞 mean を含む受動文の問題

この論文では、動詞 mean を含む文の統語的・意味的諸特性を分析する。まず、若干の先行研究を見てみよう。

(1)　He likes you.　　(no passive)
(2)　She didn't really mean that.　(no passive)

(Declerck (1991: 201))

認知に関わる意味を表わす心理的な動詞の場合は、受動文が許されないことがDeclerck (1991: 201) で述べられている。例文 (2) で用いられている mean は、「.... のつもりで言う」の意であり、「彼女は本気でそう言ったんじゃない」といった意味を表わす。しかしながら、後で見るように、この意味では、動詞 mean を含む文は受動化が可能であり、Declerck の例示は不適切である。このような例示の一因として、心理的な動詞 desire, want を含む場合は、受動文

が許容されないという事実に影響されたことが考えられる。例えば、(3), (4) は非文法的である。

(3) *A rest was desired by John.

(4) *Good health was wanted by Mary.

(Fiengo (1977: 60))

当然のことながら、動詞 mean を含む受動文に関するこのような誤解の元は何か、ということが問われなければならない。その答えは、動詞 mean が「 .... を意味する」という意味で用いられる場合、受動文は許容できないという事実に求めることができる。

(5) a. 'Maison' means 'house'.

b. *'House' is meant by 'maison'.

(Huddleston (1971: 94))

動詞 mean を含む受動文の可能性について取り上げた研究は、思いの外少なく、上で述べた観察が代表的な例といえよう[1]。一見すると問題は以上で尽きているように思われるが、事はそれほど単純ではない。例えば、大塚 (1956) では、外見上は (5b) の語順が倒置されたようにみえるタイプの文が取り上げられている。付け加えるまでもなく、「.... のつもりで言う」という意味で用いられている。下記の例文 (6)-(8) および訳は同書 (p. 79) による。なお、(8), (9) の訳では、意図性の読みがはっきりしないけれども、日本語としては許容される曖昧な表現といえよう。

(6) And by thought is meant the images and atmosphere....
(思想内容とは心象と気分)

(7) By the phrase 'sound change' is meant those changes in pronunciation....
(「音声変化」とは発音の諸変化)

(8) People are never tired of talking of Byron's pose, of Byron's Byronism, by which is meant his vanity, his affectations, his insincerities.
( .... これは彼の虚栄、きどり、不眞面目などを意味するのである)

ここで興味深いのは、このような例が稀ではないことと、例文 (9) の be 動詞の用法に対する書き手自身（特定は不可能）の注釈 (=(10)) である。(9), (10) は、大塚 (1956: 78-79) からの引用である。

(9) "By the term literature *is* meant those written or printed compositions which preserve the thought and experience of a race recorded in artistic form."
(文学という語によって、藝術的形式で記録された一民族の思想経験を保存する書かれた或いは印刷された文章が意味される)

(9)に記された is は are とあるべきではないか、という英語学者 (A. Smith) の意見に対して、英文学を専門とする著者は(10)のように答えている。

(10) "In this particular case all I can say is that I regard the construction as elliptical and not without the sanction of literary usage. If asked to parse the sentence I should supply the word *this*, as — 'By the term literature *this* is meant (namely): those written or printed,' etc. The use of *are* rather grates on my ear, although it might stand as technically correct."
(この特定の場合に於て私の言い得るすべてのことは、私はこの構造を省略的と考え、それについては、文学的用例の賛同なきにしもあらずということです。若しこの文章を解剖せよと言われるなら、私は this をいれます。... are を用いるとどうも耳障りなのです。その方法が専門的には正しいのでしょうが)

(10)の説明で注目すべきは、問題の文を著者は省略を含む指定文 (specificational sentence) の一種と考えている点である。指定文は、ある変項 (variable) に対する値 (value) を指定する文であり、いわば未知数（変項）に対する答え（値）を特定するはたらきを担っている。つまり、(10) の文を著者は、次のように考えている。

(11) By the term literature <u>*this*</u> is meant (namely): <u>those written or printed....</u>
変項　　値

文頭の by the term literature が表わす中身が代名詞 this を介して変項に、those written or printed 以下の内容が値に相当する関係にあるという理解である。しかしながら、典型的指定文の表示は、次のようになる(cf. Declerck (1988))。

(12) By the term literature is meant <u>the following</u>: <u>those written or printed....</u>
変項　　値

このように、[未知数—答え] という指定文としての見方は、問題の受動文の役割をある程度捉

えている。しかしながら、重要な難点がある。それは、問題とされる受動文 (9) は、指定文に特有のいわゆるコロン (colon) の音調 (cf. (12)) を持たない、つまり、those written or printed.... の前に音調の切れ目がなく、休止が置かれないという事実である。何か未知のものがあって、後からその答えになるものが現れる、という配列を他の構文に求めるとすれば、結局、提示文 (presentational sentence) に辿りつくことになる。4 節で、提示文の観点から問題とされる受動文を取り上げる。

さて、再び大塚 (1956) の記述に戻ることにしよう。同書では、(6)-(8) のような文は文法的に誤っていると見做されているが、果たしてそうであろうか。とりわけ、(7) がイギリスの著名な英語学者であり、*The Universal Dictionary of the English Language* (1934) の編者でもある Henry C. Wyld の著作から引用されていることを考慮するならば、慎重に判断すべきである。実際、Wyld (1920) には、次のような文もみられる (後出の (16), (17) も参照)。

(13) By the history of a language is meant an account of its development in all its dialects, of all the changes which these have undergone....

(Wyld (1920: 4))

また、このような用法は古風な用法というわけではなく、(14), (15) が示すように、現代の言語学者の著作にも見ることができる。大塚の見解は、表面の形式にとらわれ、問題とされる構文の特質を十分に考慮しておらず、誤りである。

(14) In one view, which dates from the 1940s, what we have to study is the DISTRIBUTION of these smaller units. By that was meant the class of 'contexts', as defined by the remainder of a sentence, in which they can be identified; and, where different units have a similar distribution, it is on that basis that they belong to the same SYNTACTIC CATEGORY....

(Matthews (2007: 1))

(15) Relevant to the explanation of non-parallelism in the sense of completion for different predicates is the existence of lexical idiosyncrasy in language. By *lexical idiosyncrasy* is meant the different (and apparently arbitrary) ways in which languages match lexical items with the different stages of the evolution of a unitary phenomenon....

(Spears (1977: 106))

これまでの例文の観察から、さしあたり、次の特徴を挙げることができる。すなわち、By

X/By the phrase Xという文頭の部分は、文の情報構造からは、文の主題 (theme)の役割を担っている。ここで主題とは、文頭の位置にあり、「～について」を表わす部分である。上掲例では、X の内容はすでに先行文脈に現われており、By X /By the phrase X は後続要素との連結の役割を果たしている。いずれも先行文に現われた語句を受ける形で、その中身を後続文で明らかにする、という流れである。(14) では、the DISTRIBUTION of these smaller units, (15) では、lexical idiosyncrasy の中身が後続文で示されている。次の (16), (17) は、By X の先行要素が節の見出しに相当するという点で、注目に値する例である。なお、(16) は、上掲例(7)の原文を少々長めに引用したものである。ここで問題とされる受動文は、談話において提示文の役割を果たしているが、この点については 4 節で論じたいと思う。

(16)　　CHAPTER　IV
　　SOUND CHANGE

By the phrase 'sound change' is meant those changes in pronunciation which take place in every language in the course of time....

(Wyld (1920: 67))

(17)　　Primitive Germanic.

By this term is meant, as already indicated, that undifferentiated form of speech, distinguished from *Primitive Aryan* by possessing the characteristic Germanic features,...

(Wyld (1920: 196))

## 2．受動文の統語的特徴

本節では、問題の受動文（以下、提示的受動文と略）の統語的な特徴を検討する。再び、もとの文を挙げることにする。

(18) = (5)　a. 'Maison' means 'house'.
　　b. *'House' is meant by 'maison'.

(19)　a. By 'mansion' we mean a very large house.
　　b. By 'mansion' a very large house is meant (by us).

(18b) は非文法的であるが、(19b) は文法的である。さらに、(19b) の主語の a very large house を文末の位置に移動（後置）すれば、提示的受動文 (20) が生成され、結果的に英語の文構成の原則に適った文末焦点 (end-focus) をなすことになる。1 節で述べた大塚 (1956) の見解は、

このような過程を考慮しておらず、皮相的である。

(20) By 'mansion' is meant a very large house.

(20) が示すように、提示的受動文は、By X is meant Y. が典型的パターンであり、意図する主体 Z は潜在化しており (cf. (19b))、文全体としては、X, Y, Z の 3 項 (argument) が関与している。対応する能動文 (19a) では、関与する 3 項 (X, Y, Z) が明示されている。一方、(18a) では、2 項 (X, Y) だけが関わり、「X は Y を意味する」と解される。意図する主体 Z を欠いているので、(18b) のような受動文は存在しないのである。

(19a) のように、対応する能動文の目的語が単数形の場合は、混乱はないけれども、能動文の目的語が複数形の場合は、受動文の主語と動詞の数の一致 (number agreement) ということが問題となる。例えば、前節で挙げた (21), (22) のような文である。これらの場合、文末の後置主語は複数形であるけれども、先行の be 動詞は単数に一致している[2)]。

(21) = (6) And by thought is meant the images and atmosphere....

(22) = (7) By the phrase 'sound change' is meant those changes in pronunciation....

(21), (22) の生成の前段階として、(23), (24) の文を想定できる。(23'), (24') が示すように、単数動詞の呼応は許されない。先行する主語名詞句が複数形を表わしているからである。

(23) And by thought the images and atmosphere... are meant.

(24) By the phrase 'sound change' those changes in pronunciation... are meant.

(23') *And by thought the images and atmosphere... is meant.

(24') *By the phrase 'sound change' those changes in pronunciation... is meant.

動詞の数の一致という問題に対しては、主語名詞句の文末への後置の際に、動詞の複数形から単数形への義務的な変換を想定することができる。あまり一般的な変換とは言えないものの、By X is meant Y. の X に複数名詞が生じている場合が間接的な手がかりを与えてくれる。(25), (26) と (25'), (26') では、一貫して単数動詞で呼応しており、By X の X の数（単数/複数）は、動詞の数の一致には関与しないことがわかる。

(25) By the words "terror of flight" and "gloom of the grave" is meant the third stanza of our national anthem.

(26) By the dots of the 'i' and the crossbars of the 't' is meant the dots and dashes of

the International Morse code.

(25') *By the words "terror of flight" and "gloom of the grave" are meant the third stanza of our national anthem.

(26') *By the dots of the 'i' and the crossbars of the 't' are meant the dots and dashes of the International Morse code.

以上の観察をまとめると次のようになる。すなわち、主語名詞句が文末へ後置される場合は、By X is meant Y. という提示的受動文において X, Y の数（単数／複数）にかかわりなく、動詞は単数で呼応するように義務的に変換されるということである。

次に、包括的な英文法書として定評のある Quirk et al. (1985: 1380) の分析を参考に見ておきたい。同書では、次のような例文が示され、これらは倒置文として扱われている。(27) は本論文で対象とする提示的受動文に相当する。

(27) By 'strategy' is meant the basic planning of the whole operation.

(28) Slowly out of its hangar rolled the gigantic aircraft.

(29) Equally inexplicable was his behaviour to close friends.

Quirk et al. (1985) は、いずれの文も倒置文と考えている。(29) の例であれば、(30a) が基本的な語順であり、be 動詞を軸として倒置が生じた文が (30b) (= (29)) ということになる。

(30) a. His behavior to close friends was equally inexplicable.

b. Equally inexplicable was his behaviour to close friends.

(27) のように文頭に前置詞句が現れる倒置文の例としては、(31), (32) を挙げることができる。(31b), (32b) は be 動詞を軸とした倒置文を表わしている。

(31) a. Max and his family were among the guests.

b. Among the guests were Max and his family.

(32) a. The two tramps you are tracking were under the bridge.

b. Under the bridge were the two tramps you are tracking.

(27) の例に戻ると、Quirk et al. (1985) の分析は、(33a) が基本的な文であり、(33b) (= (27)) が倒置により生じた文と想定していることになる。しかしながら、(33a) は非文法的であり、1 節で取り上げた (5b) と平行的である。この事実は、提示的受動文が倒置により生成されると

いう分析が誤っていることを明白に示している。(33b) の生成過程は (35) のように仮定すべきである（なお、関連する例文として、後出の (45), (46), (45'), (46') も参照されたい)。

(33) a. *The basic planning of the whole operation is meant by 'strategy'.
b. By 'strategy' is meant the basic planning of the whole operation.

(34) = (5) a. 'Maison' means 'house'.
b. *'House' is meant by 'maison'.

(Huddleston (1971: 94))

(35) a. By 'strategy' we mean the basic planning of the whole operation. [能動文]
b. By 'strategy' the basic planning of the whole operation is meant. [受動文]
c. By 'strategy' is meant the basic planning of the whole operation. [後置]

Quirk et al. (1985) の分析の問題点は、これに留まらない。提示的受動文を倒置文であると見做す限り、By X it is meant that .... という外置文の存在を説明できない。例えば、(36) のような文である。that 節を義務的に外置しなければ (37) のような非文法的な文が生じるけれども、倒置文と考える方式では、説明不可能である。

(36) ... It appears that only *that* complements can be totally external to the subject of the embedding predicate. By totally external it is meant that the subject has no role in the formulation of the content of the complement: the subject, so to speak, merely reiterates that which has been communicated to him....

(Spears (1977: 89-90))

(37) ??*By totally external that the subject has no role in the formulation of the content of the complement is meant.

以上の考察から、Quirk et el. (1985) の分析は根本的に誤っていることが明らかになった。しかしながら、示唆的な面もあることを指摘しておきたい。上掲の (27)-(29) の文は、談話において提示的な役割を担っており、文末の名詞句の指示対象が後続の談話に導入されるという点で共通である。同書で提示的受動文が誤って倒置文と見做されたのは、文の構造を十分に検討することなく、もっぱら意味機能の共通性だけに注目したことが原因である。

## 3．行為解説文とmean の用法

毛利 (1980) は In doing A, he is doing B. という構文に関して、「A することは、B するこ

とに相当する」という意味関係が成立すること、つまり、B が A という行為を「解説」していることに注目している。とりわけ、「英語では、行為 A を B と言い換えることによって A の内容を解説するとき、B の部分に進行形が用いられる」ことを例証している。例として、次のような文を挙げることができる[3]。

(38) When you buy a bond, you are lending money to a company or government.

また、A の動作が文 S を発話するという、発話行為である場合には、do A = say S であるので、In saying S, he is doing B. が成り立つことが指摘されている。一つの例として、次のような文を挙げることができる。

(39) In saying, "Certainly I will help you," he is making a promise.

(毛利(1980: 25))

さて、行為の解説に動詞 mean が関わってくる場合には、どのようなパターンが顕著であろうか。結論を先に言えば、When A says X, A means Y において、A, X, Y という 3 項 (argument) が明示的にかかわるパターンが典型的である。つまり、A の発話行為を後続文の A means Y で「解説」している関係にある。上の毛利 (1980) の説明および例文 (38), (39) の場合とは異なり、後続文には進行形ではなく、単純形が顕著に現われる。(40) では、弁護士の Mason が女性の依頼人に対して、いかにも安物らしい香水を買うことを勧め、それを確認している。(41) では、外見からは明らかに殺人事件と思われるけれども、実際は、偶発的な事故が原因であったことを話し手 (Poirot) が説明している。また、(42) では、Wright 博士が著書の中で「文語的な英語」の発音と述べているのは、標準的な口語英語の発音のことであるという解説がなされている。

(40) " ... Buy yourself some good cheap perfume, and when I say cheap, I mean cheap. Souse it all over everything you've got. Do you get me?"

(E.S. Gardner, *The Case of the Howling Dog*)

(41) Quite unmoved by the superintendent's vigor, Poirot replied calmly, "When I say an accident, I mean that there was no intent to kill."

(A. Christie, *There Is a Tide*)

(42) ... When Dr. Wright, in the *English Dialect Grammar*, speaks of the pronunciation of 'Literary English,' he means, of course, *Standard Spoken English*....

(Wyld (1920: 69))

これまで見てきた例文では、前半部に定形節が現れ、明示的な発話行為が示されていた。これに対して、前半部が前置詞句の形をとり、定形節ではない場合もある。下記の例を参照されたい。

(43) Claude Hagège (e.g. 1993) is one of the few linguists who has been sensitive to the power of language, drawing on a vast store of knowledge of languages from around the world. In talking of the power of language, I do not mean only its power as exploited in political contexts, but what it achieves at every institutional and personal level in human lives....

(Halliday (2003: 269-270))

(44) In seriously using the sentence, 'The whale struck the ship', ... I was using each of these expressions in a uniquely referring way.[4)]

(43), (44) の場合、文頭の要素は、形式的範疇としては前置詞句でありながら、内容としては文的な意味すなわち＜コト＞を表わしている。つまり、定形節の場合ほど明示的ではないものの、発話に関連する行為を表わしていると理解することができる。これに対して、本来的な前置詞句の場合であれば、明示的な発話行為を表わしていると言うことはできない。例えば、(45), (46) のような例である。このような例では、前置詞句はある語句の用法もしくは定義を表わしているけれども、発話行為を表わしているわけではない。以上のことから、問題とされる mean を含むいわゆる行為解説構文の前半部は、(i) 明示的な発話行為、(ii) 非明示的な発話行為、(iii) 単なる語句の使用（非発話行為）という一つの連続的な表現形式をとり得ることが分かる。 Sperber & Wilson (1981) 流に言えば、mention から use への転換ということになる。ついでながら、(45), (46) のタイプの文は提示的受動文に対応する能動文を表わしている。提示的受動文に換えると、(45'), (46') のようになる。

(45) ... We know, that is, that Universal Grammar exists:...

By 'Universal Grammar' we will mean, accordingly, whatever is genetically inherited....

(Matthews (2007: 182))

(46) Apart from those idioms that have as their deictic centers states that can recur in time, there are a number of idioms where the deictic center consists of a nonrecurring normal state. By nonrecurring, I mean a state which, once entered, cannot be left again — or conversely, once left, cannot be reentered....

(Clark (1974: 323))

(45') By 'Universal Grammar' is meant whatever is genetically inherited....

(46') By nonrecurring is meant a state which, once entered, cannot be left again — or conversely, once left, cannot be reentered....

ここで、前半部は明示的な発話行為を表わし、後半部の解説部分が疑似分裂文である例を補足しておきたい。(47') では、疑似分裂文により、先行文 (発話) の内容について解説 (意図の特定) が述べられている。

(47) 'My ambition is still to write a really outstanding detective novel, which I honestly do not believe I have yet achieved. When a writer says this, what he really means is that he wants to write one which will make all other detective novels look silly. Of course you can't do it. But you always keep on trying.'

[ by John Dickson Carr ]

(47') When a writer says this, <u>what he really means</u> is <u>that he wants to write one which will make all other detective novels look silly</u>.

変項　値

これまで例示した他の例と同様に、(47) の例も書き手 (発話主体) が自分の表現について解説を加えている。理屈からは、他者の表現 (発話) について解説を求めることがあり得るのであり、実際、次の (48), (49) に見るように可能である。相手の先行発話から推測された発話の意図を Is that what you mean? という倒置型の疑似分裂文により、特定し、確認している。(48) では、Ganus が今は自転車代の手持ちがない状況で、誰かが分割払いの頭金を前払いしてくれるかどうかを Claude が確認している。(49) では、妻が自分を捨てて家を出て行くつもりかどうかを Grady が確認している。

(48) ... "That's what I came in here to see you about."

"You mean — pay half down?"

"Yes, sir."

Claude was confused. "But just a while ago you said you didn't have no money at all. What are you talking about, anyhow? Is somebody going to advance you enough money for the down payment? Is that what you mean?"

(E. Caldwell, *Place Called Estherville*)

(49) "I've got to leave, Grady. I can't stay."

"Is that so?" he said, stepping back and looking at her from a distance.

"Yes, Grady."

"And you're telling me you're going to walk out on me? Is that what you mean?"

(E. Caldwell, *A House in the Uplands*)

## 4．提示文としての役割

すでに1節で述べたように、提示的受動文は、提示文の一種として解することができる。ここで提示文とは、談話で話題になるべき人・ものを談話の中へ導入する役割を担う文のことである。典型的な例として、次の文を挙げることができる (cf. Guéron (1980))。

(50) a. A man from India appeared.
b. A man appeared from India.

(51) a. A man with green eyes appeared.
b. A man appeared with green eyes.

(Guéron (1980: 637))

(50b), (51b) は (50a), (51a) を基にしており、それぞれの前置詞句 (from India, with green eyes) が、本来の位置から文末へ外置されている。外置の効果として、現れた男がインド人であること、緑色の眼をしていたことを、((50), (51) では示されていない) 後続の談話の話題として導入することができる。例えば、(51b) の後続文として、次のようなものが想定できる。

(52) As I naturally expected him to have dark hair and brown eyes, I was surprised and rolled my eyes. I stammered, "Well—well—well...."

提示文は、その役割上、談話に導入されるべき人、物の存在を問うたり、否定したりすることにはなじまない (cf. (53b), (54b))。提示文ではない通常の語順からなる文の場合は、疑問文あるいは否定文に換えることは可能である (cf. (53a), (54a))。

(53) a. Did a man from India appear on time?
b. ??Did a man appear on time from India?

(54) a. A man from India didn't appear on time.
b. *A man didn't appear on time from India.

さて、以上のことを踏まえて、問題とされる受動文の分析に戻ることにしよう。これまで取

り上げてきた受動文以外にも提示文としての役割を果たすことができる受動文がある。例えば、(55a), (56a) のような通例の語順とは異なった語順をとる (55b), (56b) の場合である。このいわば倒置された語順が現れる典型的な文脈は、直前の文において these causes, the list の説明があり、それらと滑らかな連結をしつつ、most of the traffic accidents, Bill's name が後続の話題として談話に導入される場合を想定できる。

(55) a. Most of the traffic accidents are attributed to these causes.
b. To these causes are attributed most of the traffic accidents.
(56) a. Bill's name can be added to the list.
b. To the list can be added Bill's name.

問題とされる提示的受動文と類似の役割を担う提示文として、動詞 mean 以外に understand, put を含む文を挙げることができる。

(57) By 'universal grammar' will be understood the genetically inherited rules for generating sentences.
(58) On the table was put a pearl necklace.

ここで提示的受動文 (55b), (56b), (57), (58) に共通に見られる形式的特徴を挙げることにする。それは、対応する能動文の文末に現れる前置詞句が、受動文では文頭に生じているということである。英語には文末焦点の原則があり、文の終りに重要な情報が現れるのが自然である。したがって、(55a, b), (56a, b) に見られる前置詞句の機能は異なっている。(55a), (56a) の文の主語の指示対象は、文脈上すでに既知の情報であり、文末の前置詞句の内容がより重要な情報として理解されるのが自然である。一方、(55b), (56b) では、文頭の前置詞句の内容は文脈上すでに既知の情報であり、文末の名詞句の指示対象が重要な情報と解されるのが自然である。

提示的受動文の典型例は (59)-(61) のような文である。(59), (60) の文は、1節で取り上げた例文 (16), (13) に対応し、後続文も示している。(59) の sound change という用語が文の主題であり、この用語により意図されている中身が、後続の文で導入され、明らかにされる配列になっている。(60) では、the history of a language という用語で意図されている内容が後続文で導入され、説明されている。(61) では、stress という言い方により表わされた内容とそれを例証する単語を後続文で具体的に取り上げている。

(59) CHAPTER IV
SOUND CHANGE

By the phrase 'sound change' is meant those changes in pronunciation which take place in every language in the course of time. It is easy to convince ourselves that changes of pronunciation have occurred in English, for instance, in the last 200 years. Pope's lines — ....

(Wyld (1920: 67))

(60) By the history of a language is meant an account of its development in all its dialects, of all the changes which these have undergone, from the earliest period at which it is possible to obtain any knowledge of them, down to the latest. This investigation demands the formulation, so far as possible, of the laws of change which obtain at any given moment in the language — that is, a statement of each tendency to change as it arises, and an examination of the factors and conditions of each tendency....

(Wyld (1920: 4-5))

(61) Stress. — This is the name given to what is more popularly known as Emphasis, or simply as *Accent*. By stress is meant the degree of force, and therefore of loudness, with which a sound is uttered. In such a word as *pity* the first syllable has the strong stress, the second being much weaker, and, by contrast, called *un-stressed*. In *deceive* conditions are reversed, and the second syllable has the chief stress.

(Wyld (1954: 26))

このような提示文により談話に導入される個体・存在物について、その存在を疑問の対象あるいは否定の対象とすることは不自然である。(63) の文は、but .... のような後続文の存在を予測させるのであり、このままで文が終わると、奇妙である。

(62) a. *Is by the phrase 'sound change' meant those changes in pronunciation which take place in every language in the course of time?

b. *Is by the history of language meant an account of its development in all its dialects...?

(63) a. ?? By the phrase 'sound change' is not meant those changes in pronunciation which take place in every language in the course of time.

b. ?? By the history of a language is not meant an account of its development in all its dialects.

(62), (63) のような事実は、提示文という役割を担っていない mean を含む通常の能動文の場

合に、疑問化されたり (cf. (64), (65))、not A but B のような相関的要素を伴うことなく単独で否定の対象となり得る (cf. (66)) ことと対照的である[5]。

(64) ' ... Budge has told us that the clock in the hall out there was wrong last night, though none of the others were. When you say that he left the house at twenty minutes to eleven, do you mean time by that clock, or the right time?'

(J.D. Carr, *Hag's Nook*)

(65) " ... I understand such a will has been made, and I further understand that Mrs. Belder has disappeared."

Bertha tugged at the lobe of her left ear, an infallible sign of intense concentration. "What do you mean when you say 'disappeared'?"

(A.A. Fair, *Cats Prowl at Night*)

(66) " ... Whether she did go in here or didn't, just the same I think we'd better have a look at the inside of this place." ... "And by that I don't mean march up the front steps, ring the doorbell, and flash my badge."

"Then how?"

(C. Woolrich, "All At Once, No Alice")

## 5. 結　語

本論文では、動詞 mean を含む受動文を中心に取り上げた。これまで十分に分析されてこなかった構文であり、表面上は単純にみえるものの、興味深い独自の特性があることを明らかにしようと試みた。1 節と 4 節では、大塚 (1956) の観察に反して、問題とされる受動文は文法的な文であり、機能的には提示文の役割を果たしていることを多くの実例により検証した。2 節では、動詞の数の一致という点において、統語的に独自の性質を示していること、およびその可能な説明を提示した。また、3 節では、毛利 (1980) で述べられている「行為の解説」の視点を動詞 mean を含む受動文に適用し、その視点の有効性を示すことができた。

【注】

* 例文の判断については、Ian Richards 氏にお世話になっている。ここに記して感謝の意を表したい。

1）語法に関する詳細な記述で定評のある Swan (1995) の mean の項目は、一般的な辞書の記述内容と同様であり、受動文についての記述もなく、参考にならない。また、吉田 (1995: 17) では、「... たとえば、hate, hope, like, mean, want, wish .... などは対応する受動文は存在せず、....」といった説明があるけれども、誤解を招きやすい記述である。『ジーニアス英和辞典第 4 版』、『ジーニアス英和大辞典』では、mean の説明として、＜物・事・言葉などが＞＜人・物・事＞を意味する用法では、＜◆受身不可＞という表示があり、他の用法では受動文が可能であることを示唆している点で、妥当である。

2）be 動詞が単数形をとるのが原則であるが、大規模コーパスを検索すると、複数形をとる例が若干見られる。例えば、Bank of English には、次のような例がある。

was taken to make special provisions for 'small craft', by which are meant those which do not carry more than 12 passengers, and which are

このような言語事実に対しては、判断を誤らないようにすることが肝腎である。動詞の呼応は単数形を基本とし、複数形の呼応はあくまでも派生的現象であり、変化の方向を示しているとみるべきである。

3）(38) は、金子 (2005: 17) の例を引用。

4）(44) は毛利 (1980: 116) の例を引用。

5）動詞 mean を用いて、相手の言葉をそのまま引用して確認を求めることが多いけれども (cf. (i), (ii))、言葉そのものを繰り返すのではなく、動作、行為に言及する形で確認することもある (cf. (iii)-(v))。なお、(v) は、話し手の怒り・いらだちを表わしている。

(i) "... She never did have much luck with men...."
"... When you say Jane never had much luck with men, what do you mean?"
"She kept making the wrong choices — guys who treated her badly;..."
(M. Muller, *Games to Keep the Dark Away*)

(ii) "And I would like her to meet people."
... "People? What d'you mean by *people*? Crowds? Employers? Other girls? Young men?"
"I suppose really I mean young men."
Mr. Baldock chuckled.
(M. Westmacott, *The Burden*)

(iii) ... He strutted over to the trio and said, "What does she mean by a stunt like that?"
(B. Halliday, *Blood on Biscayne* Bay)

(iv) Floyd shrugged and muttered, "What do you mean by a question like that? Are you insinuating —?"
(B. Halliday, *Blood on Biscayne* Bay)

(v) What do you mean by waking me up at this time of night?

**【参考文献】**


Clark, E. 1974. "Normal States and Evaluative Viewpoints." *Language* 50, pp.316-332.

Declerck, R. 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts.* Leuven University Press, Leuven.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Kaitakusha, Tokyo.

Fiengo, R. 1977. "On Trace Theory," *Linguistic Inquiry* 8, pp.35-61.

Guéron, J. 1980. "On the Syntax and Semantics of PP Extraposition," *Linguistic Inquiry* 11, pp.637-678.

Halliday, M.A.K. 2003. *On Language and Linguistics.* edited by J. Webster. Continuum, London.

Huddleston, R.D. 1971. *The Sentence in Written English.* Cambridge University Press, Cambridge.

金子輝美. 2005.「行為解説の形式」『英語語法文法学会第13回大会予稿集』, pp.17-21.

小西友七・南出康世編. 2001.『ジーニアス英和大辞典』, 大修館書店

小西友七・南出康世編. 2006.『ジーニアス英和辞典　第4版』, 大修館書店

Matthews, P.H. 2007. *Syntactic Relations: A Critical Survey.* Cambridge University Press, Cambridge.

毛利可信. 1980.『英語の語用論』, 大修館書店.

大塚高信. 1956.『英文法演義』, 研究社

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman, London.

Spears, A.K. 1977. *The Semantics of English Complementation.* Ph.D. dissertation, The University of

California, San Diego.
Sperber, D. and D. Wilson. 1981. "Irony and the Use-Mention Distinction," In *Radical Pragmatics*. edited by P. Cole, pp.295-318. Academic Press, New York.
Swan, M. 1995[2]. *Practical English Usage*. Oxford University Press, Oxford.
Wyld, H.C. 1920. *The Historical Study of the Mother Tongue: An Introduction to Philological Method*. John Murray, London.
Wyld, H.C. 1954. *The Growth of English*. John Murray, London.
吉田正治. 1995.『英語教師のための英文法』, 研究社出版

【2009年 8 月11日受付、10月29日受理】

# Presentational Passives

## SEKI Shigeki

This paper is concerned with examining various properties of passive sentences, in particular, those passive sentences with the verb *mean*. Typical examples are shown as follows: *By thought is meant the images and atmosphere..../By the history of a language is meant an account of its development in all its dialects....* This type of passives has not been fully analyzed in the linguistic literature and there seems to be some misunderstanding about its grammatical status. The following points are shown in this paper: this type of passives is fully grammatical despite its apparently peculiar number agreement; from a semantic point of view, these passive sentences constitute a kind of presentational sentences and have their distinct functional roles in discourse.